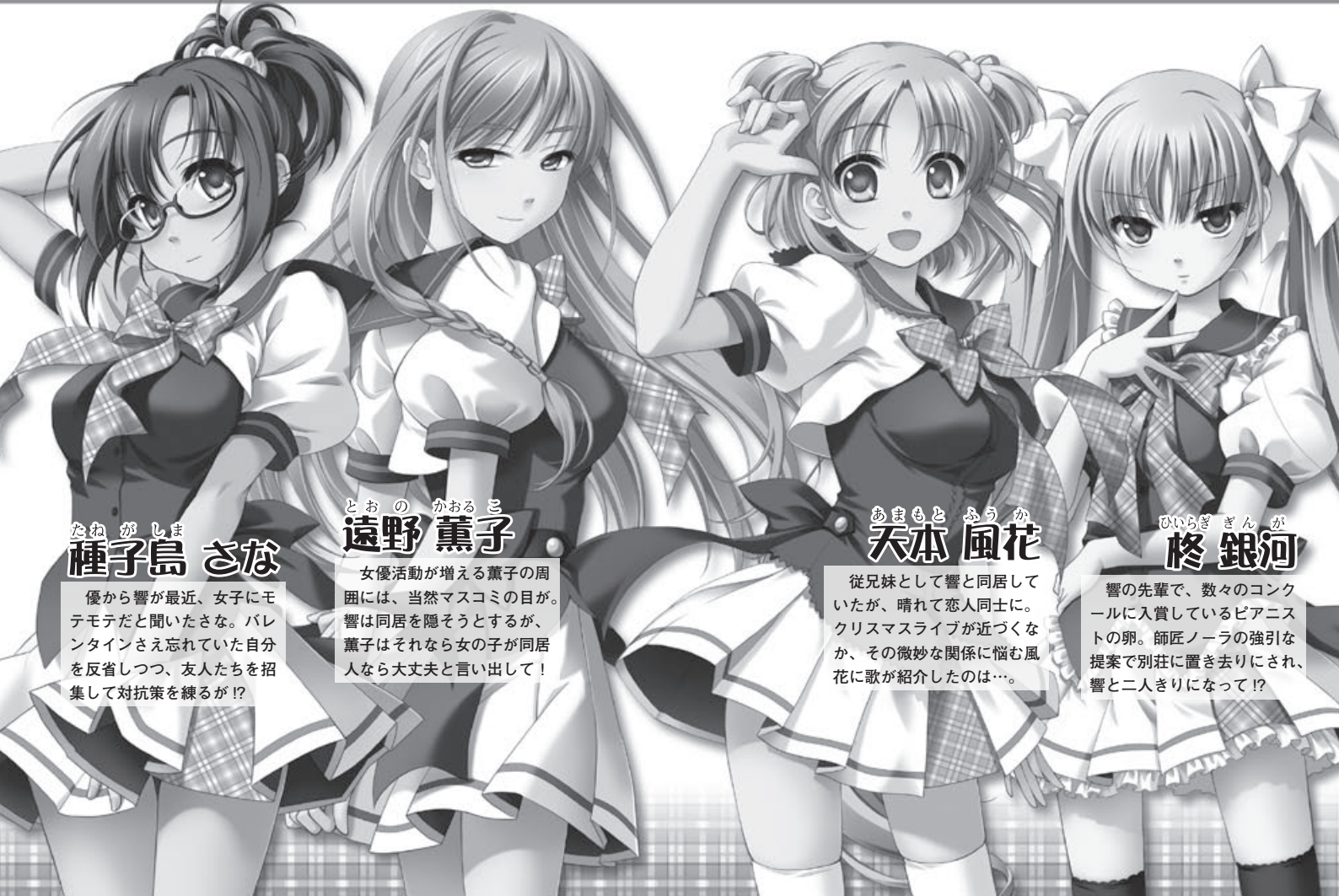
著：**森崎亮人**
画　：**ぎん太**
原作：**チュアブルソフト**

ぷちぱら文庫



種子島（たねがしま） さな

優から響が最近、女子にモテモテだと聞いたさな。バレンタインさえ忘れていた自分を反省しつつ、友人たちを招集して対抗策を練るが!?

遠野（とおの） 薫子（かおるこ）

女優活動が増える薫子の周囲には、当然マスコミの目が。響は同居を隠そうとするが、薫子はそれなら女の子が同居人なら大丈夫と言い出して！

天本（あまもと） 風花（ふうか）

従兄妹として響と同居していたが、晴れて恋人同士に。クリスマスライブが近づくなか、その微妙な関係に悩む風花に歌が紹介したのは…。

柊（ひいらぎ） 銀河（ぎんが）

響の先輩で、数々のコンクールに入賞しているピアニストの卵。師匠ノーラの強引な提案で別荘に置き去りにされ、響と二人きりになって!?

2人のピアノ・デュオ

銀河 story

天本 響

才色兼備な姉の影響で大抵のことは出来るが、これという特技のなさを気にする青年。彼が恋人に選んだのは…。

「か、可愛い!? バカでしょ、何言ってるのよ！ イジワル、変よ！ あ、こらぁ、脱がすなぁっ……！」
「風呂上りに寝巻きになると先輩、ブラしてないんですよね……ほんと、どれだけ、我慢してたか……！」
初日、当然夜はそういったことがあるだろうと思ったらこっぴどく怒られた。
ここに来た目的考えろ、と。確かに銀河の言うことは正しかった、理解もした。けれど、理性がそれで完全に静まってくれる訳が無い。そして、風呂から上がってもピアノの練習をすることもほぼ毎日だった。
寝巻きにノーブラの彼女が横にずっと居て、何日も我慢した響はむしろ頑張った。けれど、そのせいでたまりに溜まってしまっていた。止まりそうになかった。
「あ、や……急に胸、舐めるの、だめぇ……んぅんっ……！」
一応抵抗しようとする銀河。
けれど力が全く入ってなくて、響は軽く手を押さえているだけで良かった。
「あ、や……放して……」
「放しません」
言葉も弱い。かすれるようにつぶやくだけで、それじゃあ響も止まらない。
「ん、あんっ……ん、あ、ふぁ……んんっ……」

放さない、と言いながら響は銀河に唇を寄せてキスをする。
「ちゅ、っ……ん、は、ちゅぱ……あ、んんっ……や、はぁ……」
一度唇にキスをした後に、覆い被さるようにして額にまたキスをする。抵抗がほとんど無い、と言っても両手は銀河を押さえるのに使ってしまっているので、口くらいしか自由に動かない。
「あ、ん、んんっ……や、舐めちゃ、んぅ……」
「先輩、いいにおいですね……シャンプー、持ってきたんですか？」
いつも通りの銀河の髪の匂いが、響の鼻をくすぐる。
「だ、だって……長いから、ちゃんと普段通りに手入れしないと……や、あぁ、噛んじゃだめぇだってば……ん、んぅっ……！」
髪ごと、銀河の耳を軽くはむ。身をよじる銀河の耳から首筋をたどるように、ついばむようなキスを繰り返す。
銀河がぐったりと身を任せてきたのを見て、響はそっと手をずらそうとしたら、片手は捕まった。
ぎゅっと、指と指を絡ませあうように手を握られる。その手には応えたまま、反対の手をそっと銀河の体になぞらせる。
腕、肩、首筋、鎖骨となぞってそこから指を下に滑らせれば仰向けになってますます薄

く感じる銀河の胸肉に指が浅く沈む。
「……ほんと、なんでブラしてないんですか」
「な、何でって言われても……い、いらないし……」
形が崩れる、邪魔になる。寝るときにブラをつける理由はいろいろある。けれど銀河にとっては寝ている間にブラをつけている方が邪魔になってしまうと感じていた。
響もそれは知っていたけれど、何か文句があるように鎖骨と乳首の間の胸の肉を指でぐるぐるとなぞる。
「何よ、それで時々のぞき込んだりしてる癖に。文句でもあるの？」
「いや、普段ちらっと先輩の胸が見える分にはうれしいんですけど……」
ぎゅっと銀河から抗議するように、握りあっている手の力が強くなる。
「こうしてるときに、脱がす喜びが無いのはなあ、って思って」
抗議の力が強くなって、手の甲に爪が食い込んでいく。
「ほんとに、エッチなんだから……！　どうせ脱がすときにわたしが恥ずかしがるのを見て楽しんでるんでしょ！」
「ええ、そうですよ！」
顔を真っ赤にしてにらんでくるけど、それでも十分楽しめる――というか、それも興奮する。そんなに怒っているように見えるのに胸は丸出しだし、片手はしっかりと銀河から

握ってきているのだ。
「大体、先輩だってこんな下着じゃないですか。ほんと、俺に脱がして下さいって言ってるようなもんですよ」
銀河の下着は、横が紐状になっているもので、布地も元々そんなに多く無くそして一本ひもを引っ張ってしまえば、はだけてしまうものだった。
「べ、別に響くんに脱がされる為にはいてるんじゃなくて、かわいいからよ……！」
「知ってるけど、それはそれとして簡単に脱がせますよね」
胸から手を放して蝶結びになってるわっかのあたりをもてあそびながら耳元でささやくと、銀河は顔を赤くして目を背ける。
「……イジワル言うんだ」
「先輩がかわいいからいじめたくなっちゃうんです」
「ずっと思ってたけど、響くんってイジワルして楽しんでるわよね……趣味悪いわ」
「こんなことするの先輩相手だけですよ」
「そうじゃなきゃ困るけど……んっ、あもう……キスでごまかすし……」
むーっと銀河が体の下で響をにらむ。
そのままぷい、と横を向いた首筋に、舌先をつぅ――と滑らせる。
「ひゃっ……！　あん……もうっ……！」

銀河の体が、びくんとはねる。
そのまま響は舌を下にすべらせていく。首筋から胸元へ。薄く、それでもきちんと女らしい膨らみにナメクジが這ったような唾液の道筋が伸びていく。
「あ、あぁ……」
もう少し、で頂点にたどり着くというところで響はその動きを止める。銀河は、ほっとしたような残念なような息をつく。
「先輩、かわいいですね」
「な、何言ってるのよ！　バカ、バカっ！　揉むほど無くて悪かったわね！」
銀河は目を閉じて照れを隠すようにじたばたと暴れる。
「揉むくらいはあるじゃないですか、それに俺にとってはこのくらいが一番好みだし」
というか、銀河を好きになったから、今まであやふやで小さめくらいがいいかなー、と思っていた好みが完全に固まったというべきか。
小さい胸だから好き、というよりも銀河だから好き、と言った方が正しい。
「変態、少数派。イジワル、ベッドヤクザ」
「……前三つは仕方ないとしても、最後のはそんな言葉誰に聞いたんですか」
「誰でもいいじゃない」
誰か、と言われれば祭(まつり)だ。もっとも、女の子だけのお茶会のときに響とのエッチの話を

半ば無理矢理白状させられ、そして皆が「ベッドの上では強引でイジワルだと……？　調子乗ってるな、あいつ」なんて思っていた。つまり満場一致だ。
そんなことをつゆ知らず、響は銀河のあらわになったままの胸に手のひらを重ねた。
「あっ……」
「俺だけじゃなくて、エッチになると先輩だって乗り気だったり無理する癖に」
響はイジワルをするように、胸を手のひらで痛くはならないよう気を遣いながらだけど、こねくりまわす。
「や、んぅっ……む、無理なんてして……ない、んぅ……いつも、響くんが、無理矢理、じゃない……！」
「無理矢理ってどんな風にですか」
「そ、その……外、とか学校で、とか。あとは、お……お尻で、とか……」
元々銀河にはセックスの知識は保健体育レベルでしか無い。舐めたり吸ったり挟んだりするのと同じように、そういうものなのかと思っていたけれど、実は銀河が響のモノを舐めたりすることに比べればさほど一般的とも言えないことは今では理解していた。というか、教えて貰っていた。
「先輩だって、気持ちよかったんじゃないですか」
「そうだけど……そっそうじゃなくて！　そうやって、いつもなんだかんだでそうやって

ごまかして……んっ！　今、だって……そうやったら、わたしが胸、気持ちいいの、分かってて……ずるい……」

手のひらを使って、乳房と乳首を一緒に撫でるように、こねるように胸を愛撫する。

「だって、先輩こうするの好きじゃないですか」

「だ、だからっ！　好き、だけどそうやってごまかすのが、ずるいって言ってるの！　いつもは、もっと素直でかわいいのに……」

かわいい、と言われて響の琴線が少し震えた。感動、というよりも反骨で。

「そーですか、かわいいですか。今かわいい声出してるのは先輩ですけどね」

堅くなってきた乳首を、わざと指でこすりあげる。

「ひゃぅんっ……！　や、あ……！」

手を一度放すと、薄い胸の中央で盛り上がった乳首を指先でつまんだ。

きゅっ。くに、くに――。

「あ、や……すこし、痛っ……ん、だから、しびれちゃ……ひゃっ……！」

このくらいならいつもやってること、という強めの力加減で銀河を責める。

「じゃあこっちですか」

手を引っ込めると、銀河がほっとした息をついて――響は間髪入れずに唇で乳首をくわえて、吸い上げた。

ちゅぅ……！

「あ、ああっ……！」

ちゅぱ、ちゅぅ……！　わざとらしく、音を立てて吸い上げる。胸の、特に乳首の弱い銀河は体を震わせる。

「あ、ああっ！　や、んっ……ふぁ、ああっ……！　や、響、くん……だめ、そんな、わざと音たてて、もう、やだぁ……」

言葉に反して、弄っていない方の乳首もぷっくりと大きくなり始めていた。響はそれを横目で見ながら、舌と唇で責め立てる。

「や、やだ……変態！　わざと、音たてなくていい……あ、ああ……見えるように、しなくて、いいからぁ……！」

「ぷは……なんで、見えると困るんですか？」

「だ、だって……」

「こういうことされてるのが見えると、困るって……どんどんエッチな気分になっちゃうってことですか？」

「ばかっ！　ばかばかっ！　わざわざ言うな！　う、うぅうう……！　変態、ドS！　エッチ、えっちえっち！　もう、知らないっ！」

首まで赤くして顔をそむける銀河。

クリスマスやってみました

風花 story

「別にイチャイチャなんてしてません。このクリスマスライブの話をしてたの」
そう言って風花はポスターを指さす。
「二人で見に行くですか？」
「違うよ祭ちゃん。俺達に出ないかって話が来てるんだよ」
「お、おお。なるほど、あの音楽祭に出たからですね！」
流石に自分の姉が昔同じ流れで出たことがあるからか、話が早かった。
「それでフーカは出るですか？」
「どうしよっか？　キョウくん」
「俺は風ちゃんが出るっていうなら弾くよ」
「キョウくんは出たくないの？」
「んー、そんなに乗り気にはなれないかなあ」
日々、楽しく過ごせればそれで良い。そんな響には名声欲とか自己顕示欲のようなものはほとんど無かった。それに、自分のピアノはまだまだ人前に出て胸を張って聞かせられるレベルのものじゃないとも自覚していた。
「それは、可愛い彼女を自分だけのものにしておきたいからですか？」
「……それに関しては、例えそう思っても……無理じゃないかな……」
「おわぁ!?　キョウくんさんの顔に影が！」

学校の音楽祭のトリで、その辺は風花が大々的に恋人宣言してしまった手前、何を今更言っているんだ。と、響は諦めている。
従兄妹同士、しかも同居中なのに付き合っていることが知れ渡ってしまっているのだし。それで今まで周りから何も言われなかった訳でもない。
「じゃあじゃあ、フーカはどうなんですか？」
「んー……わたしとキョウくんが仲良しなのは出来るだけ人前で言うんじゃありません、って玲音さんに言われてるんだよねー」
「……ライブの舞台って、のろける場所じゃないものねー――基本的には」
歌が思わずカウンターの向こうから口を挟む。もっとも、その応用を自分たちの年代で見てしまっている手前、強く否定も出来ない。
「あとは、まあ。学校の音楽祭ならともかく、そんなプロの人達も来るライブにわたし達が出てもいいのかなあ、って」
「出ても良いって向こうが思ってるから、招待状が来てるんじゃないの？」
「そうですよー。その辺は自信持てばいいですよー」
「だけど、うーん……」
風花は元々、自分の歌に自信を持っていなかった。
響と一緒だから、胸を張れる。強くなれる。そんな思いをぶつけた音楽祭だったけれど、

こうして改めた舞台になるとまた別の話だった。
「それにおねーちゃんだって別にプロじゃないのに出て歌ってたですよね？」
「まあねー。もっともクリスマスではあたしは前座だったけど」
「前座？　歌さんってメインボーカルだったんじゃないんですか」
「一応は。だけど、やっぱりあたし達の中で一番歌が上手いのはあたしじゃなくてオトメだったしね」
　度々聞くそのオトメという名前。
「クリスマスライブも、あたしたちの最後はオトメがびしーっとキメたし。その後頑張ってプロになったしね」
「……そっかー、プロになった人が居たんですねー」
「おねーちゃん、フーカが余計にプレッシャー感じてるですよ」
「あはは、ゴメンゴメン。だけど、オトメだって最初から直ぐプロになれるほど上手だった訳じゃないの。ずっと一人でギターの練習ばっかりやってて、正直あたしたちに会うまであんまり友達も居なかったみたいで」
「オトメセンパイ、あんなにキュートなのに不思議ですよねー」
「そうねー。まあ、本人がギターと音楽だけあればいいって生活してたのもあるけど」
　人見知り、というよりも人とのつきあい方を知らなかった。歌はそう思っていた。

「なんか先輩みたいだなぁ」
「銀河ちゃんは確かにちょっと似てるかも。だけど、どっちかって言えば風花ちゃんの方が似てるかも」
「わたしですか？」
「うん。オトメもね、ギターも音楽も好きだっただけで、最初からその道に進みたかったって思ってた訳じゃないのよ。だけど色々あって、本当に好きで、その道を目指すことにして……あとは、まあ。それを応援してくれた人に応えたいってのがあったとゆーか、うーん、はぁー……」
「おねーちゃん、顔！　顔！　すっごい渋い顔になってます！　そこはもう割り切ったんじゃなかったですか！」
「そのつもりだったんだけど、意外に割り切れて無かったというか、別にオトメ達が幸せそうなのは嬉しいんだけど、それとあたしの感情や幸せは別問題といいますか……」
　渋柿でも食べたような苦い顔をする歌。ただ、当事者ではない響と風花は何の話をしているのか分からず、とりあえずシブーストを食べる。美味しい。
「割り切り、ねー」
　その辺苦手な風花が、ケーキをもぐもぐしながら呟く。割り切りは苦手だけど、最近決めてしまうのは得意なことに気付いた。そこは似ているけれど違う、ということにも。

例えば、響と付き合い続けることや離れられないということ。そしてそれについて堂々としていることはもう決めたことだ。

けれど、玲音との約束でせめて卒業までは「大人しく」しているようには割り切れない。この辺、わがままだっていうのは分かっているけれど、響のことが好きだから割り切れない。我慢出来ない、とも言うのかもしれない。

さて、それじゃあクリスマスライブのことはどうなんだろう。

歌うことは好きなんだけど、果たしてそれで出ていいのか。どうにもこのままじゃ踏ん切りがつかない。

「なんかフーカが知恵熱でそうな顔してるですよ」

「風ちゃん、おーい。風ちゃーん？」

「ねえキョウくん、わたしのこと好き？」

「好きだよ。……だけど、それとこれと何の関係があるの？」

「いや、なんとなく」

どうにも決心がつかない。こんな気持ちで出ていいのかなー、素直に先輩とかに譲った方がみんなのためになるような気がする。

「うーん、風花ちゃんの為になるか分からないけど、ちょっといいかな？」

「なんですかー、歌さーん」

久々に頭を使いすぎたせいか、風花の声が間延びする。

「その、あたしと一緒にコンクール出た子が今度近くのライブハウスでライブやるの。見に行ってみる？」

「それってサトー先輩ですか？」

「違うわよ、さっき話してたオトメよ。今度、オトメもクリスマスライブに呼ばれてるからって少し早めに結ノ宮に来てるの」

「おおおお、オトメセンパイのライブ！　単独ですか！　おねーちゃーん、あたしも行きたいですよーーーー！」

「祭ちゃん、急にテンションが上がったね」

そして急に上げすぎてあっさり貧血になって「はふぅ」と椅子に座り込む。風花がいわんこっちゃない、という顔で扇いで風を送る。

「あ、あの歌さん」

「なあに、風花ちゃん」

「その、オトメさんって、今何してる人なんですか？」

歌は「あれ、何て言うんだっけ」と少し悩んだ後。

「シンガーソングライガーやってるのよ」

と言った。

ミニスカートのFunnyFaceGirl

薫子 story

これは、薫子が仕事を再開して響と一緒に二人だけで暮らすようになった後のお話。

●

遠野薫子は現役の結ノ宮学園の学生でありながらプロの女優だ。
かつて子役として一世を風靡し、そのまま引退。それがまた最近になってなじみの映画監督に請われて役者として復帰を果たしていた。
現在は復帰第一弾の映画撮影に参加中。かつての天才子役の復帰に、映画ファンや薫子のファンだった人たち。それに芸能関係者、あとは彼女の暮らしている周囲もちょっとした騒ぎになっていた。
撮影はまだ終わっていないけれど既にその映画の宣伝は始まっており、薫子は役者として、そして学生として忙しい日々を送っていた。

そして秋に入り、彼氏である響は薫子の住むマンションの部屋に本人の意思確認無く半ば強引に引越しさせられ、同棲するようになっていた。
同い年の彼女に完全に養われる形で同棲中。
いまだお互い学生ではあるものの、それは良いのか？と響は常々思っていたけれど、こ

の状況を崩していいか、と言われるとそれも嫌だ。だから余計に困る。
「……ああもう、またこんなにして。脱いだら脱ぎっぱなしにするのやめろよー」
二人の住む部屋。リビングから薫子の部屋に向かってまるで道しるべのように着ていた服が脱ぎ散らかされていた。
それに気付いた響が、呆れと照れと困りを混じらせた顔をして拾い集めていく。
「だって疲れたんだもの、仕方ないじゃない」
開けっ放しのドアから、薫子が下着だけしか着ていない上半身を出して抗議する。
「うわあ！　着替える前に出てくるなって！」
「別に下着くらい見慣れてるでしょ」
「そう言う問題じゃないんだけどなー」
「ふぅん、それじゃどういう問題なのかしら」
「……いいから早く着替えてこい。いつまでも下着で居るつもりか」
「響がその方が良いっていうなら、それでもいいわよ」
「良くない」
ふて腐れたように響が返事をすると、薫子は満足げにくすくすと笑いながら部屋に引っ込む。完全に弄ばれてる。わかっていても、どうにもならない。
深呼吸みたいなため息をついて響が洗濯物をカゴに入れて戻ってくると、薫子も着替え

終わって、居間に出てきていた。
ゆるい、体を締め付けない部屋着は肩とか胸元とかの露出とかはさっきと大して変わっていない。腹が見えないのが救いかなー、と思うけど、それでいいのか。
「いい加減、涼しくなってきたんだからそんな格好だと風邪ひくんじゃないか」
「んー……家に居るときにあんまり着込むの好きじゃないのよねえ」
年頃の男が一緒に住んでるんだから気にして欲しい。
といった嘆願は「その気になったら好きにすればいいじゃない」というとんでもない意見で封殺されていた。
困った、本当に。そう思っていたらソファに座った薫子が黙って手招きをしていた。気づけ、このバカ。とでも言いたげな目をしている。
響は黙って横に座ると、その足に薫子が身を預けてきた、膝枕だ。
「ほんと、気がきかないんだから」
「スミマセン」
文句を言いながらも甘えてくる猫みたいに頬を摺り寄せられて響は固まってしまう。違うところも硬くなりはじめてる。それに薫子は気付いていても気にしないか、もっと酷いことをする。
幸いというべきか、今日は何もせずに枕にしているだけだったけれど、それでも響の理

性と忍耐が試されることに変わりはない。
どこを触っていいか、と手持ち無沙汰な手で薫子の髪をそっとすくように撫でながら、逆の手でつけっぱなしだったテレビのチャンネルを変えて行く。
時間は既に夜の11時過ぎ、放送局は少ないしそもそもチャンネルをかえた所できちんと見る訳でもない。
「遠野、明日――」
「薫子って呼べって何度言えば分かるのかしら」
響のむき出しになっているふくらはぎをつねられて、思わず声を上げそうになる。
「か、薫子！　あ、明日学校は行けるの？」
「んー……どうしようかしら。撮影は無いんだけど……」
連日の撮影。その中で時々帰ってきては午後から授業を受けたり、逆に午前だけ受けて撮影にまた出かけていったり。
そんな無茶なスケジュールを続けていて、響の目から見て薫子は疲れきっていた。
一日くらいゆっくり休んだ方がいいんじゃないか、なんて言ったらどう思うだろう。
「響は学校に行くんでしょう」
「そうだね」
一方響は普通の学生通り、とは言いがたいにしろ、特別忙しい訳じゃない。秋に入って

水泳部の活動も終わってしまったし、家事全般を引き受けているのは薫子と暮らしだす前からだから、やることそのものはこれといって増えてない。
「響が行くなら行こうかしら」
「それで倒れたらどうするんだよ」
「響に看病してもらうわ」
「そういう問題じゃないと思うんだけど」
「何よ、私と一緒に居たくないっていうの、ふぅん」
「そんなことは無いって！　ただ、無理させたくないんだよ」
「無理かどうかは私が決めるわ」
そう言われると響は何も言えない。無理するな、と言えばしてないと言われるのは分かってるし、わざわざ意地の張り合いになる言い争いをする気も無い。
この状況に「完全に尻に敷かれてるわねー」なんてニヤニヤしながら言う悪友の顔が思い浮かぶけれど、事実過ぎて反論も出来ない。
それに、学校でも態度を変えないというか、流石に膝枕はさせないものの響が恋人であることを薫子は隠す気は全く無いらしい。
仕事上、それでいいのかなあと思いながらも、言ってしまえば響は薫子の物といっても過言ではない関係になってしまっているので文句なんてとても言えない。所有物万歳。

そうなったのも、どれもコレも響が不甲斐ないせいだというのも分かってる。自分の行動の結果がこのお互いの力関係だ。
「……何考えてるの」
「黙って甘えてるときの薫子は可愛いのになあって、痛ーーー！」
「どうせ普段は可愛くないわよ」
「ち、違う！　普段は可愛いって言うより美人だって思って、あ、足！　いたぁー！」
爪まで立てて響の足をつねり上げ、ふん、と息を吐いてからまた甘える姿勢に戻る。
「いいじゃないの一緒に住むようになったのに、滅多にこんな風に出来ないんだから」
「そうだけどさ……」
響と薫子の同棲が始まったのは、仕事に復帰したタイミングだった。
それから薫子は忙しくて、あまり部屋に戻ってくることが無い。帰ってきたとしても疲れて寝てしまったりすることが多かった。そんな現状もあるからこそ、響も薫子が何を言っても出来るだけ叶えてあげたいと思っていた。
「……ま、学校も行けるなら行った方がいいよなあ。このままじゃ薫子、風ちゃんと祭ちゃんと同じ学年になっちゃうかもしれないし」
主に出席日数の都合で。成績も怪しくない、と言えば嘘になる。
「それだけ聞くと別にいいかな、って思うわね」

「良くは無いだろ」
結ノ宮学園は芸能活動が単位にならない。そういった意味で、銀河もピアノの長期レッスンやコンクールのために休むと普通に欠席扱いになると言っていた。
もっとも、理解のある先生も多く大抵の場合は提出物でどうにか埋め合わせられるとも言っていたけれど。
「……薫子、課題とか提出物とかも弱いもんなあ」
「響が手伝ってくれるから大丈夫よ」
「手伝いまでしかしないよ」
今居る事務所からは、普通に卒業したいのなら転校も考えておいた方が良いと言われているらしいけれど、別に卒業が目的じゃない、学生として楽しみたい。
と薫子は結ノ宮から離れる気は無いらしい。
「もっとも、卒業したら響連れて多分東京に行くけど」
「……まあ、俺もそっちの大学に行きたかったしいいんだけどさ」
関西か関東。響の行きたい音楽系の大学は、そういった大都市にこそ多かった。けれど、響はまだ薫子にその辺をきちんと話したことが無かった。
だから薫子は興味なさげに「ふぅん」と頷く。もっとも、そういったフリをしているだけでどうして響が東京の大学に行きたいか気になっているのを隠しているだけだ。

響はそれに気付かず「興味無いのかな」と、薫子の頭を優しく撫でる。
そうしている間も響は情けないと思いつつ、男の本能がかなりやる気を出していた。
どうしよう。久々に夜帰ってきた薫子が、薄着でくっついている。しかも、その気になったら好きにすればいいのに、なんてお墨付きはとっくに頂いている。
これで何の気も起きなかったら逆に問題が有りすぎる。
そんなことを思いつつも、我慢した方がいいんじゃないかなー、という理性みたいなものが働いていた、薫子だって疲れてるだろうし、と。
もっとも今更、躊躇するような関係でも無い。今までに何度だって襲われたり踏まれたり我慢出来なかったり夜に忍び込んだり返り討ちになったり、愛し愛されしてきた。どちらが主導かはともかくとして。
今日だってしたっていいんじゃないか。
止めておくべきいくつもの理由は、あっさりと本能に押し負ける。
とはいえ、ここで急に押し倒すのもなー、なんて考えていると普段なら「何考えてるの？」なんてイタズラっぽく流し目で見上げてくる薫子がおとなしくしていた。
どうしたんだろう、とそっと薫子の顔を覗きこむと。
「ん、すぅ……」
いつの間にか、寝息を立てていた。

元々、完全に安心しきって響に体を預けて転がっていたから、寝ても気付かなかったのか。自分の鈍感さに呆れる。決して、エロ本能と戦ってて気付かなかったとかそういう訳じゃないんだぞ、と言い聞かせて。

「……疲れてたんだろうなあ、やっぱり」

だったらこんなソファで寝かせておくままには出来ない。

響は起こさないようにそっと薫子を抱きかかえる。俗に言うお姫様抱っこの姿勢になっても、まだ薫子は起きなかった。

それだけ疲れてたのか。あとは、響の前ならそれだけ無防備になっても良いと思っていたのか。腕の中で静かに寝息を立てる薫子に、流石にこれを起こしてまで何かしようという気は起きずに、寝室まで運んでベッドに寝かせる。

「――おやすみ、薫子」

自分は明日の用意とかしないとな、そう思って離れようとしたら服の裾を握られていた。起きてるのか？　そう思っても薫子はしっかり寝ていた。寝たふりでもなさそうだ。

さて、どうしよう。

これを離してもいいんだけど、そうするのもためらわれる。

響は小さくため息をつくと。

「……分かった、一緒に寝よっか」

優しく頭を撫でた。やることは明日早く起きればどうにかなるだろ、そう思って後回しにすることにした。そもそも、薫子の居ない時間の方が長いんだし、その間に出来ることばかりだ。

今は、薫子のそばに居ようと思った。

●

決して恋人同士の甘いだけの愛の巣、なんてことは無く。どちらかと言うとお母さんと外で働いている忙しいお父さんのような関係を続けていた響と薫子。

最初は「不健全ですよ！」だの「毎日ですか！」だの言っていた友人達も、そんなことにはなってないと分かって、どちらかと言うとオアズケ状態の多い響に同情するようになっていたり、ほっとしたり舌打ちしたりしていた。

もっとも「あんな美人の彼女と同棲して面倒見てる時点で勝ち組じゃ！　もげろ、むしろあたしと代われ」なんて言う女友達も居たりした。ちなみに薫子と代わって欲しい訳ではなく、響と代わりたいのだから男らしいというしかない。

「それで、今日も遠野さんは来てないのね」

昼休み、食堂での昼食中に銀河がそう聞く。

冬と受験と
女のプライドのバレンタイン

さな story

それは、響とさなの卒業前の冬の話。

●

2月に入って、一週間ほど過ぎたある日。
大学受験も終え、響とさなは結ノ宮で受験勉強に追われない日々を過ごしていた。
「正直、音大の試験ってどんなんだったのよ」
冬の結ノ宮は寒い。二人は暖房のきいたフォレスタで、暖かい紅茶とデザートを前にだらだらしていた。
少なくともさなは久々に受験勉強の重圧から解き放たれたからなのか、最近は普段に増してゆるくなっていた。
「んー、学科の部分はセンター試験なのは言ったよな」
「そーね。ってことは試験って完全に実技？」
「ほぼ実技。まあ楽典とかもあったから筆記もあったんだけど」
さすが音大、と言うだけあってセンター試験で必要な科目は多くて3科目。必要な教科が少ない分、響は一年以上、ピアノの練習をみっちりやってきた。
もっとも、銀河が卒業してしまった後は自習しつつ、紹介してもらったピアノ教室に通

うという練習になっていたけれど。当然、銀河が居た頃に比べてどうしても練習そのものの質は代わって来る。普通のピアノの先生は、響がミスった瞬間に指し棒で殴らない。
「……なーんか、受験終わってから響が苦い顔してんの良く見るんだけど」
「いや、それは……ねえ？」
「言いたいことがあるならはっきり言え、言いなさい」
「怒らない？」
「内容次第では怒る」
響はほんの少しだけ迷った後。
「……実技で多少やらかしました」
二秒。
その間、さなは必死に怒鳴りつけたいのや、怒って手を出すのを我慢したけれど、やっぱり我慢は二秒が限界だった。
「やらかしたって何したのよ！　緊張して失敗でもした⁉　響ってば本番は得意じゃなかったの⁉」
「や、あの。楽譜が跳んだとか緊張で手が震えたとかは、あったけどどうにか出来た範囲なんですが」
「それもあったの⁉」

「そ、それをどうにかしようとしてしくじったというか」
銀河がもしそれを評価するとするなら「また跳んだ!? しかも一部殆ど作曲じゃない！音を足すな！ 繋げるな！ ああもう……かろうじて破綻はしてないのが憎たらしいけど……」と、恨みがましい目で響を見てきたことだろう。
つまりはいつも通りだ。
「……つまり、どういうことなのよ」
「……試験、という場を考えると自信がアリマセン」
発表会や好き勝手弾いていいライブじゃない。試験に求められるのはそれこそ銀河の行うような「綺麗で正しく、どれだけ曲を理解しているかを表現する演奏」だ。
銀河は「ピアニスト」で響は「ピアノ弾き」。器械体操と雑技団の空中技はどちらも高度な技術が必要だけど、点数が観客の歓声ではなく器械運動の採点方式であるならいくら雑技団のアクロバットを見せ付けても評価には繋がらない。
それを、銀河は口を酸っぱくして言っていたし響も理解はしていた。
そして当然さなも演奏としての違いは分からなくとも、響がそういったタイプだというのは説明されて理解していたので。
「……はぁあぁぁぁ……」
力なく椅子に崩れ落ちた。

「そんで、どーすんのよ」
「ど、どうっていうのは？」
「大学。受かってたらあたしと一緒に東京出て住もうって言ってたじゃない」
テーブルに顎をついて、上目遣いで恨めしそうな目で見てくるさな。ふて腐れてるようにしか見えない。
「それだよなぁ……」
さなが今暮らしているせせらぎ寮は結ノ宮学園の学生に貸し出されているアパートだ。当然、卒業したら出て行かなければならない。
もしも落ちていたら受験勉強の間は実家に戻る、という手もあるし多分そうなるだろう。響も玲音の所で暮らしながら受験とピアノの練習に明け暮れる予定ではある。
「どっちか受かってたら東京出ないとなんない訳じゃない？ そんとき、どーすんの」
「さなは自分が落ちたらどうするか考えてないだろ」
「まっさかー。響だけ受かってても東京出るわよ？」
しれっと、当然のように言うさな。
「さながそのつもりだったなら、俺もそうしようと思ってたんだけど」
「ほほう。つまり、あたしのみずみずしい体が目当てだと……？」
「はいはい、俺が落ちたままついてってそんなこと口にしたら『そんな暇あればピアノの

練習しろやぁー！』って蹴りくれる未来しか見えないんだけど」
「当然じゃない、良く分かってる♪」
はぁ、と響はため息をつく。
「まあ、さなと1年近く会えなくなるのは寂しいってのもあるけどさ」
「う、そう言うことを言われると照れるにゃー……って、ある〝けど〟って何よ。他になんか理由があるっていうの⁉」
「いや、先輩が居るからなんだけど――」
「……あん？」
さなの声が険を帯びる。触れたら切れそう、というよりも頭の上に大きなハンマーを振りかぶられてるような気分になる。
「ま、待て！　ほら、俺が受けた音大。とりあえず第一志望は先輩の居る所だったのはもう話したしお互い納得しましたよね……⁉」
「まあね、それで？」
「で、俺のピアノの先生って言ったらやっぱり先輩な訳ですよ、デスヨ！　で、東京に行ったらどのくらいの頻度になるか分からないけどまた先輩にピアノを教われる訳で！」
師匠の日比谷ノーラが非常勤講師を勤めていたり、元々既にコンクールなどで結果を出している銀河は殆ど特待生のような状態だったという。

けれどもノーラがそれを許さず「普通に受験なさい」と銀河も一般受験。もっともその言葉の裏には「実力を見せ付けてやんなさい」という意味もあったとか。
「……つまり、東京に行けば銀ちゃんにまた個人レッスンをしてもらえる、と」
「そ、そそそうです。先輩もオッケーしてくれてるんだって」
「ちっ、あたしの居ない間にいつの間に……！」
「いや！　さなと一緒に居たいのもちゃんとした理由だよ⁉　だけど、例え俺が落ちてても、東京に行くのには利点があるというかさ！」
「まー、あたしが落ちて、ただ一緒に居たいからってだけでついてくって言ってるのよりはいいんだけどさー。そういう先生が結ノ宮に居る訳でもないしねー。くっ、やっぱり響にとって一番頼れるのは銀ちゃんなのね……！」
「ピアノに関してはね」
くそう、とさなが泣きまねをする。その辺、さなは実際学校の授業で習った音楽以上のことは何もわからないので頼りにならない。
「まあ、とにかく受験の結果がどうなるかだよなあ……」
「そうねー……」
自信のあるさなだけど、受けたところも生半可な所じゃない。幾ら、模試の結果がよくて実際のテストも手ごたえがあっても結果が出るまでは分からない。

「ところで響はそろそろ時間じゃない。大丈夫なの？」
「え、あ。そろそろ帰って飯の準備しないと」
受験中は玲音達も気を使ってくれていたけれど、既に響は受験を終えた身だ。そうすると、またみんなのお母さんとしての日々が帰ってくる。
「そんじゃ、悪いなさな。また明日学校で」
「はいはいー、そんじゃねー」
レシートを持って席を立つ響。あ、とさなが自分の分を払おうとしても、さっさと出て行ってしまった。
「……まったく、ちゃんと割り勘にしろって言ってんでしょー」
まあ、今度なんかお礼しよう。
「おーい、ウェイトレスさーん」
とりあえず夕飯もここで食べていこう。ちょっと時間がある分は、この間アメリカから届いた科学雑誌でも読むことにする。英語はまだどうにかなるけれど、ドイツ語のページがあるのは勘弁して欲しい、とついでに電子辞書も取り出す。
「もう、ウェイトレスじゃないっていうのに……どうしたのさなちゃん」
そう言って、店の女子制服を着た優――響とさなの共通の友人で同じ水泳部の仲間がやってくる。銀河が卒業した後、バイトを募集する前に歌が頼んで雇って、そしてそのま

ま1年近くこうして働いている。
「いや、そのカッコはウェイトレスでしょ」
「うぅ、そうだけど……」
河合優は生物学的には男である。しかしもう三年の付き合いになる響もさなもそれを認めると何か間違ってしまう気がして認められないでいる。
雇い主である歌も同じなのか、優に支給された制服はウェイター用のものではなく、ウェイトレス上下一揃いだった。そもそもエプロン以外に男子制服は存在しない。
ちなみに、この店には水泳部仲間のみならず結ノ宮学園生もよくやってくるが、ウェイトレスとして働く優を見ても皆の反応は「ああ、うん。そうだよね」とありのままを受け入れるだけだった。
お陰で優の「何で!?」という意見は見事にスルーされてしまっていた。
「とりあえず、ココア頂戴ー。歌さんのココア美味しいのよねー」
「うん、ココアね。ホットでいいんだよね」
「この寒い中アイスココアを飲めと……？」
外は本気で寒そうで、正直ここから部屋に帰るのもためらわれる程だ。それでも帰らないとならないんだけど。
ココアの注文を入れて、立ち去ろうとする優の手をさなが捕まえる。

「さなちゃん？」
「ちょっと付き合いなさい」
今のところ、忙しくはないしそうしても大丈夫ではあるけれど仕事中だ。
優が困って見回すと歌がウィンクを返してくる。
その向こう、店長が「春瀬も学生時代はやっていたしな」と呆れたように呟いた。
「よし、オッケー出たわね」
「強引だよー……」
とはいえ、何も無いなかで待っているよりは、さなと話していた方が優も楽だ。流石に座りはしないものの、さなのそばで話を聞く。
「んで、優は別の大学行くのよねー」
「あはは、受かってたらだけどね」
「お姉さんにはモデルにならないかって言われてたんじゃなかったっけ？」
「それ、姉さんの悪ふざけだよ。ボクじゃそんなお仕事できないって」
さなと歌が揃って口には出さないけど「出来るだろ」と心で通じあった。もっとも、どんな服を着せられるモデルなのかは気になる所だけど。
いくつか受けた中で、第一志望の大学に受かれば歌さんの友人も通っているとかいたとか。世間は狭いのか、結ノ宮での選択肢としては良くある話なのか。

「……照れ隠しなら最初からやるなって」
自分からそうやって足を広げたりとか、さなは滅多にしない。それでもするのはサービスとか、自分からするって言った手前のことなんだろうなあ。
そう思いながらも、硬く膨らんだモノをそっとさなの割れ目に押し当てる。
「それじゃ、いくよ」
「うん、あ、えと……あんまじろじろ見るなって……！　ひぁ、あ、んぅっ！」
響は先走りと精液とでぐちゅぐちゅになったモノを、愛液のにじみ出したさなの割れ目へと押し当ててぐっと押し込んでいく。
「ふぁ、あ……入って、くるぅ……ん……」
「ん、さな……」
響はさなの顔を見つめて、ゆっくりと沈めていく。
――ぐぷ、ぬぷぷ……。
「あは……響の、やっぱり、おっきぃ……」
もっとも、誰のでもこんくらい苦しいんだろーか？と、さなが終わった後に不思議そうに首をかしげたことがあった。
お互いほかに経験が無いから分からないということで、バカなことを言うさなのほほをつぶしてことなきを得たのだったけれど。

響はふとそのことを思い出して、意地悪くいきなり奥を突き上げる。
「ひぁっ！　あ、ああっ！　ちょ、ちょっと……や、急に、奥、苦しっ……！」
響はさなの足を抱えると、膨れ上がったモノで奥をごりごりとこする。亀頭の先がこするたびに、さなは苦しいとも気持ちいいともつかない嬌声を上げる。
「や、はぁっ……響の、奥……だめ、だってばぁ……ん、ひぁあっ……！」
最初に手でされたときの快感が残っているせいか、響の方は歯止めがきかなくなっていた。ほとんど全力で、さなの膣内を突き上げる。
「あ、んっ！　は、はげしい、ってば……んぅ、ふぁ、ああぁっ！」
さなの声、匂い、触った感触、久しぶりだということ、響にとっては我慢出来る訳がなかった。
「や、あぁ……ん、んぅっ！は、響っ……！　そ、そのまま、なの？　や、もうちょっと……やさしく、してくれない、の？」
「ごめん今日は、ちょっと無理……」
響はさなを抱きしめると、キスをした。
「んっ……！　ちゅる、くちゅ……ん、はぁ……あ、あっ……！」
深い、舌を絡ませあうキス。唾液が絡み、近くこすれあっている体から沸き立つお互いの汗の匂いが混ざり合う。

「響、もっと……キス、して……ん、ちゅっ……はぁ、んむ……んんっ……」
腰の動きをゆっくりさせながら、さなを抱きしめ、口づけを続ける。汗で濡れた体が密着して、絡み合う。
「ん、ふぅ……ちゅる、れろ、ふぁ……はぁ……ん、ちゅっ……響のキス、やっぱり好き……えへへ」
顔を見て、うっとりと目を細めるさな。
その表情に響がぐっときて、そのままもう一度キスをした。
「んんっ！　んんんっんーー！」
もう一度唇を重ねると、緩やかにしてた腰の動きを早く強くして、思い切りさなの膣内を深くこすり上げる。
たゆん、と胸が揺れ、汗が飛び散っていく。
「ふぁぁっ！　あ、あっ……あ、や、響……そ、そんな突かれかたしたら、やっ……」
「気持ちいい？」
「き、気持ちいいけど、や……響と、するの……好き、だけどぉ……」
「俺も、好きだよ」
「う、ぁ……そ、そう？　なら、良かった……けど、だけど……もうちょっと、やさしく、ひぅっ……！　あ、あっ、あ……」

響は腰の動きを早くして、愛液のあふれる濡れたさなの膣内をこすり上げた。
さなも、出来るだけ自分から動こうとしているのは響にも分かる。だからこそ、二人は互いの動きに合わせて腰を動かす。
ぐり、とさなが逃げるように腰をひねると、それだけで響にも途方も無い快感が押し寄せる。根本から先までをねじるように握り込まれているようだった。
「ふぁ、あ、あんぅっ……！　や、それ、だめぇ……」
「さ、さなが……動いてるんだよ」
もどかしそうに身をよじるさな。そのたびに、決して小さくない胸が目の前で揺れる。
響はほとんど無意識のまま手を伸ばしていた。指の腹で乳首を弄りながら揉みしだく。
「あ、んふっ……そんな、胸さわっちゃ……感じ過ぎちゃうから……」
切なそうな顔をされて、ますます止まらない。親指の腹でさらに乳首を弄りながら、胸をもてあそぶように揉む。
意地悪をするように、響は腰を強く打ち付けた。
——じゅぶ、ぱちゅんっ。
「あは……ん、出たり入ったりすると、エッチな音……しちゃってる」
さなが身もだえるたびに、背筋までゾクゾクとした快感が走る。気を抜くと動きを止めてしまいそうなので、その快感にあわせるように腰をすりつけるように動かす。

ぷちぱら文庫

Sugar+Spice2
明日の明日のまた明日

2010年　11月 2日　初版第１刷 発行

■著　　者　　森崎亮人
■イラスト　　ぎん太･曲本(SDイラスト)
■原　　作　　チュアブルソフト

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製･複写･放送･データ配信などをすることは、
かたくお断りいたします。
落丁･乱丁はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©RYOUTO MORISAKI ©Chuablesoft
Printed in Japan 2010

PP004

Temptation 2
ぷちぱら文庫07
春風菜 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円(税込)
12月上旬 発売予定!

描き下ろしアフターを
今回も収録予定!
12月上旬 発売予定!
ぷちぱら文庫05
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
あるてみす。原作
定価 670円(税込)
姉GAME P! 2

女女禁少女

クレージュA 原作

けなげな奉仕少女に…
快楽だけの日々をプレゼント…

お前はオレの物になったんだ！

八尋ぽち氏
描き下ろしイメージカットも収録！

ぷちぱら文庫03
春風栞 著
ポチ加藤 画
クレージュA 原作
定価 650円（税込）

好評発売中

Temptation
～催淫の奈落～

ぷちぱら文庫02
春風栞 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円(税込)

好評発売中

ぷちぱら文庫01
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
あるてみす。 原作
定価 670円(税込)

好評発売中

特別収録！

書き下ろしアフターストーリー！
姉、spring!

姉、JUMP!
ねぇ～♥ぷま～♪

ぷちぱら文庫は
ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。
応募規定は、それぞれ以下のようになります。
皆様のご応募をお待ちしております！

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが５ＭＢ以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は１ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方にのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、２週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011　東京都杉並区梅里2-40-19　ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報は、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。
作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。